Okinawa Prefectural University of Arts

加治工真市教授退官記念号の刊行にあたって

波照間永吉

加治工真市教授が定年で退官することとなった。加治工教授が赴任されたのは、本学開学間もない、1986年10月のことである。仄聞するところによると、沖縄県の高等学校、東京都立大学や山口大学などで長年教職にあられ、大学教育および大学運営について豊富な経験と知識を有して居られる先生は、沖縄に新しくできた大学のために絶対必要なスタッフと、請われてのことであったという。

先生と附属研究所の関わりは、研究所がその活動を広げ、より強固な態勢を作り上げていくために構想された「兼任所員」の制度の新設によって芸術・文化学部門の一員と成られたところから始まる。当時の研究所長は横道萬里雄先生であった。紀要の刊行や公開講座などがようやく始動しだした頃である。その横道先生退官後、内田るり子先生が研究所第３代所長となられた。内田先生は、新たに東南アジア文化研究の必要性を提唱され、研究所の活動の一つの柱とするよう努められた。その内田先生の後を承けられたのが加治工先生である。1993年７月のことである。

先生を所長にお迎えしたところから、研究所の活動はいよいよ本格的になる。しかしなお、研究所の態勢と活動は脆弱で、研究所の一層の成長と発展のためには、大学の内外に研究所の存在とその活動を訴え、研究所の事業に全身で取り組むことが必要であった。そのお仕事に関わること６年。この間の先生のご尽力が研究所の現在をあらしめてくれたものと感謝している。内側にあっては、諸規定の制定・整備から始まって、公開講演会・公開講座・研究発表会などの活動を軌道に乗せるようご指導なされた。また、ラオス社会科学院との研究交流のための協定を締結したことも大きなお仕事であった。この協定によって、ラオスの研究者を招聘しての研究交流や柳悦州教授によるラオスの伝統織物文化の現地調査に代表される研究などがなされた。これらは現在、ラオスの工芸文化研究では高い評価を受けているものであ

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

る。

先生を研究代表者とする文部省・日本学術振興会からの科学研究費による研究も、また、研究所としては忘れることのできない大きなお仕事である。以下、この点について書きたい。まず、その一番最初のものは「沖縄慶良間諸島における言語・文化・社会の総合的研究」である。この事業は、昭和63年度の途中、それも11月に研究補助金の交付が決定されるという、あわただしく困難なものであった。外間守善法政大学教授、小川徹駒沢大学教授などの支援も得ながら、総勢９名で、まさに短期集中的に慶良間諸島に通った。わずかの期間ではあったが、資料収集と基礎的調査を終え、その成果を『慶良間諸島の文献資料集 ― 沖縄慶良間諸島における言語・文化・社会の総合的研究 ―』（Ａ５版　407頁）としてまとめた。まさに研究代表者としての先生のお人柄なしには完成しえない仕事であったと、今、振り返って思うことである。

その後、平成10 ～ 12年度の３年間にわたって、文部省科学研究費補助金（基盤研究Ａ）の交付を受けて、「沖縄と中国雲南省少数民族の基層文化の比較研究」を行った。研究所が行う初の大規模な海外調査であった。雲南大学の李子賢教授・張正軍助教授、劉金吾女史はじめ多くの中国側研究者を交えての合同調査が３年間・６回にわたって展開された。この間、２度にわたって中国の先生方を沖縄にお迎えし、沖縄文化についての調査研究と合同研究発表会を開催した。この事業の成果は『沖縄と中国雲南省少数民族の基層文化の比較研究』（Ａ4版　221頁）として結実している。これまた、加治工先生のご指導力とお人柄なくしては叶わないことであったと思う。

この調査報告書に先生は「哈呢語、摩梭語の基礎語彙」という調査記録をお書きになっている。これほどに精確な哈呢語と摩梭語の活字化はほとんどなされてこなかったのではなかろうか。先生の言語学研究者としての緻密さと、世界の言語に対する深い愛着がしみ込んだお仕事だと思う。仮に、この報告書に収録された他の報告や論考が価値を失うことがある時にも、先生の「哈呢語、摩梭語の基礎語彙」だけは貴重な報告として高く評価され続けるにちがいない。

文部科学省特定領域研究「環太平洋の『消滅の危機に瀕した言語』に関す

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

る緊急調査研究」も大きなお仕事の一つである。この事業は平成13年度から15年度まで行われた。研究所からは久万田晋助教授と波照間永吉が加わった。研究所の分担した部分については、後に本学大学院芸術文化学研究科（博士課程）の西岡敏さんも加わり、宮城信勇・加治工真市・波照間永吉・西岡敏編で『石垣方言語彙一覧』（B5版　543頁）を刊行した。この大部の報告書の基礎となったのは加治工先生のお仕事である。宮城信勇先生が石垣方言の見出し語と文例カードを作り、ご自身で読み上げた録音テープの音声を加治工先生が国際音声記号で表記するというお仕事である。音声を精確に聞き取り、表記する。それにアクセント記号を付けていく。まさに気の遠くなるような、膨大で果てしない作業である（こうして出来上がった宮城信勇先生著・加治工真市先生監修『石垣方言辞典』は上下２冊。本文編の総ページ数1231ページ。その全てに加治工先生のお手が入っているのである）。宮城信勇先生の『石垣方言辞典』の完成の裡には加治工先生の方言学徒としての活動、辛抱強く、倦むことを知らないご営為があったのである。学問の進展に向かって突き進む強靭な精神と郷里の伝統文化を大切に思われるお心、そして優しいお人柄がこのお仕事をよくなさしめたのだろう、と思うのである。

本学が大学院を開設し、修士・博士の両課程を整備していく過程で先生が果たされた役割についてもふれるべきかもしれないが、すでに紙数は尽きてしまった。本記念号に参集してくれた本学大学院民族芸術文化学専修の修了生の論考をご覧いただくことによって、先生が後進の育成についてもどれほどお心を注がれたかをご了解願いたい。

先生がお元気で、これからもいよいよご活躍なされるようお祈りして、この記念号を献呈申し上げたい。

なお、本書は研究所が平成11年度より本年度まで行ってきた“与那国島の伝統文化の総合的研究”の報告書としてまとめられた。

（本文では「退官」としたが、沖縄県の用語では「退職」である。ここでは慣例に倣って「退官」とさせていただいた。）

（はてるま　えいきち・沖縄県立芸術大学附属研究所教授）

NII-Electronic Library Service